

山の上の交響楽



著者略歴 昭和27年生，武蔵大学
人文学部卒，作家 主著書「南か
ら来た拳銃使い」「裏切り砦の拳
銃無頼」「恋の拳銃無宿」「ワニ
よ銃をとれ」「銃・ワニよ銃をと
れ」（以上早川書房刊）

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

山の上の交響楽

〈JA284〉

一九八九年一月十日 印刷
一九八九年一月十五日 発行

（定価はカバーに表
示してあります）

著 者 中 井 紀 夫

発 行 者 早 川 清

印 刷 者 矢 部 富 三

発 行 所 株式会社 早 川 書 房

郵便番号 一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京（二五）三一（大代表）
振替口座番号 東京六・四七七九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社 製本・株式会社明光社

ISBN4-15-030284-7 C0193

山の上の交響楽

中井紀夫

早川書房

2540

目次

忘れえぬ人	七
見果てぬ風	五
山の上の交響楽	三
昼寝をしているよ	一七
駅は遠い	一〇三
電線世界	三五
あとがき	三九

山の上の交響楽

忘れえぬ人

ヨネマツ爺さんはただ一つどうしても忘れられないことがあって、九十を過ぎてまだ死ねずにいた。

それが辛くて、毎日のように酒を飲んだ。行きつけの居酒屋に腰をすえて、茶碗酒でごぶりとやるのである。

「お酒じゃ忘れられないことってのも、世の中にはあるものよ」

居酒屋妹屋いもやの女将はいさめたが、ヨネマツは聞きはしない。

忘れられないこと——というのは、一人息子を事故で死なせたことである。ヨネマツの目の前で、まだ十代だった息子は馬から落ちたのだ。

死ぬほどの落ち方とは見えず、その不器用ぶりを笑いながら、ヨネマツは息子の方へ近づいた。馬は下手くそな乗り手を馬鹿にしたようにじっと立っていた。春の早い時期で、雪どけで

ぬかるんだ地面の上に、息子は仰向けに倒れていた。首が、半分地面にのめりこむようにして、異様な角度に曲がっていた。

もう五十年も昔のことなのだが、ヨネマツの脳裡には、その光景が、空の青さや風の冷たい感触とともに、今も鮮やかによみがえるのだ。

「あの馬」

とヨネマツは悔み続けている。

「わしがわざと荒れ馬を選んで、むりやり^{せがれ}俵を乗せたのだよ。あれしきの荒れ馬ぐらい乗りこなせんようじゃいかんと思ってな」

「若いころに熱烈な恋をしたとか、そんなことを忘れられないのならロマンチックなのにねえ」

妹屋の女将はつかまえどころのない言いようで慰める。美人とはいいい難いが、顔のつくりや物腰にどこか男心を魅きつけるものがあって、そんな女将と話していると、ヨネマツは何とかなしに救われた気持になった。

「若い時分の色恋なんぞは簡単に忘れられるものよ。わしなんぞはまっ先に忘れたぞ」

「男の人ってみんなそうなのかしら。なんだかつまらないわねえ」

妹屋は七、八人坐ればいっぱいになるカウンターだけの小さな店である。他に客がいないと、女将は調理場に置いてある段ボール箱に腰を掛けて、カウンターごしにヨネマツの話に耳を傾

けた。

「女房のことなんてのもけろりと忘れる。忘れられないのは子どものことだ。長生きするやつはみんなそうだ。生まれた子どもを初めて抱いたときのこととか、ヨチヨチ歩きを始めたときのこととか。そういうことを忘れそこなうんだ。そんなもんなんだよ」

「あたしも子どもが欲しかったな」

「おまえさんはまだ作れるだろう」

「もう駄目よ」

「しかし子どもなんぞ作らん方がいい。わしだって、倅のことさえなかったら、とうの昔に楽になつてゐるはずだからなあ」

「およしよ、もう息子さんのことを考えるのは。いよいよ忘れられなくなるよ」

「考えまいとすりゃあかえって忘れられなくなるんだよ。あの苦しさは他人にはわからない」ヨネマツはみごとに禿げた頭を両の掌でなでまわした。「忘れようとして酒を飲む。杯を重ねて頭が朦朧としてくると、忘れたかなという気がしてくる。忘れたぞ、と思った瞬間、あの春の日の風の感触、青い空の色、ぬかるんだ土の匂い、そして倅のひんまがった首が、わっとばかりに頭の中に浮かびあがってくる。表へ飛びだして行って、歩いているやつに頭に片っ端から噛みつきたいような気持ちになる。酒はすっかり醒めちまう。どう言ったらいいのか。ほれ、不眠症というのがあるだろう。あの感じだよ。ぐーっと目蓋が重くなって、ああやれやれよう

やく眠りの淵に沈んで行きそうだと思ったとたん、またぱっちり目が覚めて、もう目を閉じるのさえ嫌になつてしまふ、あの感じさ」

「あたしもあるよ。夜中に、忘れたはずの嫌な思い出を急に思い出して、冷汗びっしょりかいたりすること……。好きでもない男にわけあつて抱かれちゃったときのこととかさ」

「ああ、そういう類いのことは早いめに忘れちゃった方がいい。それでないと、年とつてわしみたいになつちまうぞ」

人は、自分の生きてきた人生のすべてのできごと、生まれてこの方のあらゆる記憶を、きれいに忘れ去つてしまわないうちは死ぬことができない。人生を忘れ去ることはなかなかの難事業で、五十を過ぎるころから少しずつ忘れることに努めたとしても、すべて忘れ終えるのに二十年や三十年はかかった。

ヨネマツとてその困難さは承知していたから、人並みには氣をつかつてきた。しかし、ついに、息子の落馬事故のことだけが、忘却の大海の中にぼつんと浮かぶ島のように残つてしまい、同年代の爺さん婆さんたちがほとんど死んでしまった今も、まだ死ねずにいたのである。

何か人の道に外れた大罪を犯しているような氣が、ヨネマツはした。

「どうして自分の一生を忘れてからじゃないと死ねないんだい」ヨネマツは溜息まじりに言う。「死ななきゃ忘れようがないことだってあるのにさ」

「さあねえ」女将は首をかしげる。「大きな袋をかついで小さな穴は通れないって理屈かねえ。

あたしにや難しいことはよくわからないけどさ」

2

妹屋の入口は引き違いの三枚のガラス戸になっている。左端の引き戸が客席への入口なのだが、初めて来た客はよく真ん中の戸を開けてしまった。すると、左手の客席と右手の調理場を仕切る形で設けられたカウンターの端にぶつかってしまう。カウンターと戸の間にはわずかな隙間があるので、様子の呑みこめない客は、面喰らいながらも無理に体をすべりこませようとする。

「だめだめ、そっちはだめよ」

女将はあわてて止めるのだが、せっかちな客はそのまま進もうとして、足下の石油ストーブをひっくり返す騒ぎになった。

この厄介な入口の入り方を、ヨネマツはしょっちゅう間違えた。ガラス戸に手をかける前に、どれが正しい開け方だったか慎重に思案するのだが、いざ開けてみると、たいいてい目の前にカウンターがあるのだ。

「また、はずれたわい」

その日も、さんざん迷った挙句に真ん中の戸を引いてしまった。

「ごめんなさい。変なところにカウンター作っちゃって」

女将が調理場から声をかけた。

いつものことだったが、ヨネマツは妙に腹立たしい気分になった。

「ガラス戸までわしを馬鹿にしやがる」

その日、ヨネマツは昼間から機嫌が悪かった。自分を情けなく思う気持やら、町の人々の憐みや嘲りに対する苛立ちやら、死ねずに年老いてゆく恐怖やらが、蝗の大群のように頭の中にわきおこって、泣きだしたいような腹のたつような、どうにもやりきれない気分だったのである。

それが、ヨネマツがついにすべてを忘れ去るきっかけとなるのだが、このときはまだそれには気づいていない。

「面白くない日だ」

眩きながら、戸を開けなおした。

店には先客があった。

妹屋のはず向いに住んでいる大工の棟梁であった。

妹屋の入口に「カウンター・バー」と片仮名で書かれた看板がかかっていたが、それはこの棟梁が作ったものである。できあがった看板を見せられたとき、女将は、

「そんなに洒落たもんじゃないけどねえ」

当惑して首をかしげたが、

「いいから、いいから」

棟梁は気にせずどんどん打ちつけてしまった。

その棟梁が、若い衆二人と一杯やっていた。

気分よく飲んでいるふうだったが、ヨネマツの顔を見ると、急にあわてたように杯を乾して立ちあがった。

「あら、まだ一本しかあけてないじゃない」

女将はひきとめたが、

「いや、きょうは疲れた。帰って寝る」

ズボンのポケットからくしゃくしゃになった札をひっぱり出し、皺を伸ばしてカウンスターの上に置いた。

若い衆二人も、わざとらしく伸びをしたりして、

「それじゃ、おれたちも」

「そうだ、あした早いんだ」

などと言いながら腰をあげた。

わしの顔を見て逃げだしやがる、とヨネマツは不愉快そうな顔でその様子をながめていた。